

日本型ウエルビーイングの構想と展望

高橋 史朗

高橋…皆さん、こんにちは。

ウエルビーイングと道徳教育という全体的なテーマの下、日本型ウエルビーイングの構想と展望ということで、これから三人で発表させていただいて、休憩を挟んで、相互討論をしながら、皆さんの質疑応答を受けるという形で進めてまいります。きょう、私の資料はオンラインで参加してる方々には、全部シェアできていない資料が、きょう、お配りしているものがあるものですから、それについては画面には反映できないんですけど。きょう、この会場にいらっしゃる方は、私が後ろに準備した資料を見ていただくことが役に立つかと思えます。これは、大学で特別講義をしたときの資料とか、前回の大会のときにお話ししたものとかが、それを踏まえる必要があるもので、あえて、きょう、確認のために資料を準備しております。早速でござ

いますが、このカリキュラムの狙い、私の問題意識を最初に、若干お話をしたいと思っております。日本道徳教育学会が北陸大学で行われた際に、この道徳教育とウエルビーイングというのが、大会テーマになりました。それで、私は一年ほど前に貝塚さんに「道徳教育とウエルビーイングの先行研究、何、勉強したらいいか」と聞いたたら、「あんまりないけど、これを、まず読んでください」と言われて。白井俊という人の『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』という本を勧められました。それで、全部、読んでんですけども、そして道徳教育学会の基調講演をした方が、この方です。OECDとか国際動向のウエルビーイングの理論は分かったんですけど、後でお話をしますが教育振興基本計画、これは五年ごとに作られます。この中に、「日本社会に根差したウエル

ビーイングの向上」という大事な目標が入りました。この「日本社会に根差したウェルビーイング」とは何かという説明が、ほとんどなかった。これには、冒頭には教育の不易と流行ということが書いてあって、不易と流行のバランスを取るといことが表には出てくるんですが、教育振興基本計画の中身を見ると、どうもバランスが崩れている。縦軸の伝統とか不易の部分が、多様性を尊重するという横軸のほうに流されてしまっていて、バランスを欠いてるのではないか。もっと包括的に見る必要がある。包括的ということ英語でホリスティックと言いますが、そういう観点からこの共通性と多様性、縦軸と横軸、伝統と近代、現代の問題を論じる必要があるんじゃないかという問題意識を持っております。それで、きょう、この会場にいらっしゃる方は二枚目を見ていただきたいんですが、これが、この道徳教育学会の白井さんの基調講演の資料でございます。ここで、キーワードがありまして、一つは左側の OECD Learning Compass 2030。ここに、左の下にエージェンシーっというのが出てきます。それから、ちょっと左の上に、僕が丸で囲んでるコアエージェンシーという専門用語が出てきます。共同エージェンシー。これが、その下に説明があるんですけど、時間の関係で、後で見てください。それから、右側にコンピテンシー。これは学習指導要領を説明する際に、先生方は、このことを教育委員会から詳しく説明を受けるんですが、この

コンピテンシーという、これはどういうものかというのと、①と②をご覧いただきますと、統合的な視点からのアプローチ、ホリスティックな視点からのアプローチと、文脈に即したアプローチ。こういうものをコンピテンシーというキーワードで説明しているわけです。

こういうものと日本型ウェルビーイングというのは、どういう関係にあるのかという説明が足りない。よく理解されていないんじゃないかと思っております。それで、次の資料を見ていただきたいんですけども、これは前回、私が発表したときの資料もここに入っておりますが、今、世界で注目を受けている大谷翔平を育てた、これが日本型ウェルビーイングのモデルじゃないかと私は考えています。なぜ、そう言えるかというと、目標達成シート、これは、今や道徳の教科書にも出てくるぐらい有名になりましたが。大谷翔平が育てられた目標達成シートのキーワードを調べていくと、そこに日本型ウェルビーイングの大事なものが含まれている。これを分析すると、私は、左の上の資料ですが、「志」「道」「和」「幸せ」という、この四つのキーワードで集約できるんじゃないかと思っています。この資料をご覧いただきますと、志のところは夢とか目的とか目標とか、これが目標達成シートの要になるんですが、一つのポイントです。それから、二つ目は「守破離」という型を守って、型を破って、型から離れるという道の精神。挨拶、返事、整理整

頓という森信三先生のしつけの三原則というのも、大谷を育てた原田さんがよく強調してることですが、ここにも貫かれています。それから、彼の目標達成シートには、次の三番、「思いやり」「愛され信頼される人間」「感性」「人間性」これ全部、目標達成シートの文言。これは和ということに関わってくると、私は整理をしたい。そして、次に難が有ることを有難いと感謝。目標達成シートには、「ピンチに強い」「一喜一憂しない」という言葉が出てくるんですが、これがまさに幸せということにつながってくる。こういうふうには、私はキーワードとして、「志」「道」「和」「幸」に集約することができるんじゃないかと考えております。それから、その下を見ていただきたいんですが、これはウェルビーイングの構成概念と志道と幸の関係について、私なりに整理したものです。ウェルビーイングは、1、身体的な側面、2、心理的な側面、3、社会的側面、4、自分の未来を創造する力。これを先ほどの志道と幸の考えで位置付けると、1が道、2が幸福の幸、3が和、4が志というふうに整理することができますのではないかと。こういうふうには私は整理しています。それから、右の一番下のほうに、大学でSDGsと道徳、SDGsとウェルビーイングについての特別講義をしたポイント項目だけを挙げております。このパワーポイントをいくつか選んで、皆さんにコピーしたものであります。次のページを開いていただきたいのですが、オンラインの方はもう

しばらく我慢していただいて、すぐにパワーポイントの、皆さんにシェアできる資料に移ります。次に、これは初めてというところで学術大会、九月三日に私が発表させていただいたポイントが、きょうお話しすることにも関連するものですから、その関連は押さえておきたいんですが、資料のほうでは、皆さんに、ユネスコがリードした服部英二先生がリードされた、「多様性に通底する価値」という視点。これはもう、きょう、お集まりの皆さんには言う必要もないことですが、その中には和の概念…異なるものの調和、道の概念…対話のための理想的な場、対話の概念…対話とは解決であり、試練であり、変容であると書かれています。それから、通底（トランスバーサル）と、普遍的（ユニバーサル）との違い、これも大事な概念。そういう服部先生の問題提起。これもしっかり踏まえたいと思っております。それから、右側は情動学、要は、感知融合という視点が一つの大事なポイントなのです。

文科省では、情動学に基づく情動の学問的な研究をして、それを実践に生かすということが、研究協力者会議で平成二十四年からスタートして、五年間、子どもみんなプロジェクトに着手し、五大学、十六の教育委員会が連携して、これを実践化した。次に、こういう思想的な枠組みで、日本型ウェルビーイングを考えるかということの試論でございますが、私が最も重視しているのは中村桂子という方の生命誌という視点です。中

村さんは生命誌曼荼羅を作っておりまして、私から始まって、人間、生命、地球、宇宙というふうに広がっていく、こういうものを作っておられるのですが、これを使って、いろいろ実践化しておられる。私、私たち、そして社会、宇宙というふうに広がっていく、これは著書『道德のメカニズム』で、鄭先生がおっしゃった「道德次元」と一致します。あるいは、経済界で今、ウエルビーイング研究が進み、渡邊淳司さんという、ウエルビーイングカードを使った方たちを中心に、ウエルビーイングのつくり方が提唱されていますが、ここでも、「私、we、私たち、society、社会、universe、宇宙、この四つの段階にウエルビーイングが発展していくことを言っているのですが、ここでおっしゃっているのと同じ構造です。それから、もう一つ注目しているのは、実はこれ、あまり知られてない本なんです、『公共する経営』という本が出ておりまして、これは、『みんなの幸せがわたしの幸せ』というサブタイトルで、編集しておられるのが服部英二・中島隆博・矢崎勝彦先生です。この中島という方は、Co-becomingという大変興味深い提起をしておられまして、これは、きょうの私のレジュメの中にも、このことを書いてあります。自分が変わる「主体変容」という教育理念は大谷翔平の教育の柱になっていますが、自分だけでなく「他者と共に変容する」ということをCo-becomingというふうに提起してののです。これからは、子供のウエルビーイン

グを高めるときには、親や教師が共にウエルビーイングを図り、共に変容するということを、どうやって進めていくかという視点が大事じゃないかと思っています。このことは、共同エージェンシーと言っていることと関係があるので、そのことについても、もし時間があれば議論したいと思っています。もう一つ、前提の資料が三枚目でございますが、この資料であります。これは、この研究会でも、私が提起したことがございますが、「常若」という縦軸。そして、志を立て、道を継承するという縦軸と、和をなして、幸せを感じるという、この横軸を、私は『常若・志道和幸福』というふうにネーミングしているのですが、そういうものと日本型ウエルビーイングも関連してるんじゃないかと思っております。それから、この資料でございますが、生命誌の問題提起は。この絵を見ていただきますと、今まで道德の授業では生命に対する畏敬の念ということ、自分からスタートして、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいじいさん、ひいばあさん、三十年代さかのぼると十億人と、こういうふうに命はつながっていますよという連続性を教えてきたわけです。中村桂子さんは、三十八億年前にさかのぼって、生命の誕生というところから命が続いていると、命の連続性の中で私というものを捉えることが大事なんだと、こういう指摘をしておられます。その視点も大事な視点ではないか。それから、次の原田隆史という方は、この

左側の写真に載ってる方です。

彼が目標達成シートを作って、大谷翔平の実質的な育ての親になっていきます。教育振興基本計画には「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という目標が明記されておりまして、それはどういうことを意味してるかが列記されていますが、この点についても考えてみたいと思っております。それから、パワーポイントのほうに移りたいと思います。「情の理」論』ということをも東大の遠藤利彦教授が提唱されました。情動学のシリーズ本が東大出版会から十巻刊行されました。私感性について研究してきて、『情の理』って何だと、情と理は違うんじゃないかと思ってたわけです。しかし、『情の理』という言葉によって、これを一体的に捉える、包括的に捉える、そういう視点を与えられました。また、石川光男という、国際基督教大学で理科の教授をしておられた方が、理（ことわり）を観じることが大事だと、私に問題提起された。実は、この方は、J・C・スマッツ著『ホーリズムと進化』（玉川大学出版部）という本と一緒に翻訳した方です。ホーリズムというのは全体智。全体智というのは、包括的に見るという視点なんです。胃の細胞は、死んだ細胞が胃壁をおおい、新しく生まれる命の幕間つなぎをしてるんだ。生と死はダイナミックにつながっているんだという、それを観じることが大事なんだ。ここには、理を観じるといって、そういう観点が入って

る。廣池千九郎博士も「知徳一体情理円満」ということをおっしゃっている。律というものには二面性があり、旋律という音楽のリズムと、道徳律のほうの規律とつながっている。それが、文科省の情動の科学的解明と教育への応用に関する研究協力者会議でも進められたということです。この十六の連携教育委員会には千葉県、千葉市も入っております。そこでは、いじめや生徒指導や発達障害への対応を、対症療法から予防に転換する教員研修プログラムの開発に力を入れました。私は従来から教員「研修」に、「研究」はあるけれども、「修養」がないじゃないかと言ってきました。教育基本法第九条には、「教員は研究と修養に励み」と書いてある。研修は研究と修養の二本柱。しかし、研究はあるが、修養はない。先生が元気になるという「修養」がない。埼玉県教育委員長のときにも、それを確認したのですが、それがまさに教師のウェルビーイングに関わってくる。子どもに元気になるという前に、先生がどうやって自分の心のコップを上に向けるんだと。それから、二番目に共感というものがウェルビーイングと道徳を結びキーワードではないか。それから、先ほど申し上げたのは、中村桂子の生命誌から、生命に対する畏敬の念のパラダイム転換を図る。私の感知融合の道徳教育の視点というのは、きょう配布してる資料で言いますと、この先ほどの生命誌の資料の右横でございますが、具体的に対話的で深い学びという、これをどういうふう

授業として展開するかという仮説を、「感じる」「気付く」「見つめる」というのを主体的な学びに位置付けて、「深める」「対話する」という段階を対話的な学びに位置付けて、「協力」し、「働きかける」というプロセスを深い学びに位置付けて、授業として展開して、学会発表を続けてまいりました。それから、時間の関係で少し先に進みますが、前回の一〇三回大会の道徳教育学会の共同研究発表で、東大の光吉先生と鄭先生にも発表をしていただいて、お二人の理論をどう実践化するかということの共同研究発表に取り組みました。さて、ここからが本論でございませうが、まず、この日本型ウエルビーイングというものを考える、概念というものを整理する上で、一つのポイントは進歩から進化へ。二番目が対立から和へ。三つ目が感知融合の道徳教育の視点です。

四番目が廣池千九郎の生涯に学ぶ和という観点。杉浦重剛の視点、精神革命と科学革命の融合。そして、感知融合の日本型ウエルビーイングの教育ということで、問題提起をさせていただきます。まず、進歩から進化へということでございますが、生命誌を提唱しておられる中村桂子さんは、私は私たちの中にあるということをいつも言っておられます。そして、それは共に生きるということをいつも縦軸と関係がある。そういうことを、非常に説得力のある形で展開しておられます。進歩というのは、効率性とか利便性とか均一性だけの機械論的な世界観。

それに対して、進化というのは共通性が連続する。多様化を貫いている共通性というものがある。これを「多様の内発の継続」というふうに言っている。これは、いわば、機械論的生命世界観に対して、生命誌的世界観、あるいは、生命論的世界観と言ってもいいものです。生命誌というのは、地球上の生き物たちは、三十八億年の海に存在した細胞を祖先とし、時間をかけて進化して、多様化してきた仲間と言えると、そういう考え方でございます。これは、竹中さんから『人類はどこで間違えたか』という中村桂子氏の新刊本が出てますよと聞いて、早速買い求めました。その中で、今まで拡大、成長、進歩から、支配と、征服、操作からの脱却ということを言っておられて、共生ということが生態系の中核であると。そして、生き物としての私というものの自覚と、自然との付き合い、これが本当の豊かさだと。そして、新しい道は、生き物として古来の知恵を生かすという、伝統を生かすということにつながっている。こういう発想を持っておられる。そして三十八億年の私の命という観点で、先ほど申し上げたように、人間の手はプログラムされた細胞死によってできる。細胞は五本の指を作れではなくて、指の間に四つの谷間を作れと命令する。谷間にあたる部分にある細胞は、胚の中で自らの命を絶つことによって指を作っていく。新たな命が誕生し、前に死んでいく細胞があって、私たちの体はできてる。こういうふうにならぬ。私が、一貫して

大事にしてきた観点はホーリズム。私は三十代のときから、ずっとこのホーリズムに注目してきました。この原点は、J・C・スマッツという方が書いた、『ホーリズムの進化』という本がある。これ翻訳するのに五年もかかったんですけど、あまりにも専門語が多過ぎて、非常に厄介な翻訳作業でした。ホーリズムというのは、先ほど申し上げた全体智。これを一言で、教育に当てはめると、大事なキーワードは下のほうに書いていますが、「包括的主体性」。今までは、他から切り離された個の自立という考え方が主流でしたが、他から切り離された個の自立ではなく、つながりの中で生かされている自分。宮沢賢治が、「人類全体が幸福にならなければ個人の幸せはない」という、これが包括的主体性です。共同的主体性というコージェンシーという場合に、この共同的主体性ということと包括的主体性は関係してきます。それを日本文明で見っていくと、複雑系としての特徴がある。それは、モラロジー研究所から出していた『日本文化と感性教育』という本で、私は詳しく書いておりますが。一つの特徴は、心体の統合性と一体性の特徴がある道の文化。自然を征服するんじゃなくて活かすという、活の文化。それから、補完機能を重視する、対の文化。脳の機能から見ると、淡という文化。例えば、墨絵に表れてるのは簡素の文化。そして、内面化された関係性の間というもの的大事にする文化。こういう考え方を大事にしている。こういう

ことも一つの、日本型ウェルビーイングについて議論をしていく上で参考になる考え方ではないかと考えています。

それから、中村さんはこういう本を出しておられて、キーワードは和なんです。『なごむ やわらぐ あえる のどまら』という本です。日本文化の基礎は、和と書いて『あえる』それは、個々の姿を保ちながら調和の世界を築き上げる。多様な生き物は全て細胞でできているという共通性がある。「みんな違いが基本は同じ」。これは、なかなかいい言葉です。今の時代、多様性が強調されますが、そこに基本は同じというところが抜け落ちている。LGBTQ問題も同じなんです。多様性を尊重することは大いに結構です。しかし、そこにある、人格の尊厳性の共通性というものも大事に見ていく必要がある。次は、伊藤俊太郎先生。これはもう、きょうの皆さん、お集まりの先生方はよく学んでおられる。この部屋でも、何度もお話を伺ってきたわけですが。存在論と認識論という二項対立から、場所論への転換を提起されています。主観でも客観でもなく、両者の結び付く状況、全体の中に客観の現実を超える。状況全体を認識の場と呼んで、存在論と認識論の対立を超える、場所論への転換を強調されました。進化という絆、共生の絆が、われわれと自然とを結び付け、生き物の進化の過程で心が出現して人間が成立している。そして進化的哲学、道徳の起源論を展開されました。あと三分ぐらいになりましたので

飛ばします。西田幾多郎の理論の解説は時間的に省略しますが、廣池千九郎記念館でも西田の展示がされているようでもあります。私も若い頃からずっと、西田の哲学を研究してまいりました。昨年のウェルビーイング教育研究会にお呼びした東大の光吉先生が、四則和算ということをおっしゃっています。これに西田の提唱してきた、京都学派が継承してきた西田哲学というものを補うものがあるということ、京都大学の出口康夫教授が提案されて、「哲学数学」講座の開設というものが構想され検討されているようです。その一番下のとこだけ読みますと、西田哲学の根本概念である存在にかけて変容、しかも共に変容することを重視して、変容する人間に価値を置く Human Co-being。人の資本主義のコンセプトである、Human Co-becoming。中島隆博の『人の資本主義』って東大出版会の本にも出てまいります。廣池博士のことは、もう皆さんお分かりですので、ここでは私はあえて申しません。井出元先生の本『祖述』から、私は学ばせていただきました。和というものについて、どのようにお考えになられているかということについて整理をさせていただきます。杉浦重剛のことも、ここで述べさせていただきますました。そして、精神革命と科学革命の融合ということ、最後の内田由紀子さん、これが京都大学の教授ですが、この方が中教審の委員をされていて、教育振興基本計画に「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という目標

が明記されたのは、この方が大いに中教審で発言をされて影響力を持って、この文言が盛り込まれた。彼女の基本的な考え方は「文化的幸福」。幸福というのは、それぞれの文化によって違いますよと。だから、世界幸福度調査を一齐にやって、すぐ世界の基準で調査して、日本人は幸福度が低いぞって言われるんだけど、これは違うんじゃないか。日本人は全体の中で幸せを感じるという、集団的な幸福、集合的な幸福、あるいは協調的な幸福感。みんなが協調している中で個人の幸せがあるという、こういう幸福感だと。そういう観点を入れる必要があるんだということをおっしゃっております。さて、これで終わりますけれども、きょうはこの後、谷本先生は特に日本型教育の海外展開のお話をされます。非認知能力と非認知能力をスパイラルに育成するということについても、この後、発表されますが、それをどうやって育成したらいいか、こんなことを議論してみたいと思っております。

谷本先生は文科省の委託事業で、幼児教育、幼児期と小学校教育をつなぐ、非認知能力育成教員研修プログラムの構築に取り組んでおられるんですが。私の問題意識でいうと、それは道徳性の芽生えを、いかに育むかということにつながります。これはまさに、親と教師、幼児期と小学校をつなぐ道徳性というの、単なる学校教育の道徳教育だけではなくて、親のウェルビーイングをどう育てるかということにも、大いにつながる

てくるものではないかと思っております。そして最後に、伊勢先生には、日本史を貫く日本型ウェルビーイングの理念ということをお話しいただくんですが。できれば、それをどう実践化していったらいいか、そんなことをぜひ、この後、議論させていただきたいと思っております。急ぎ足で発表して、皆さん混乱したかもしれませんが、会場にいらっしゃる方は後で資料全体を見ていただいて、ぜひカバーしていただければと思います。以上で、私の問題提起を終わります。ありがとうございます。

